

## 第45回新潟化学療法研究会

日時 平成18年6月17日(土)  
午後3時～6時40分  
場所 ホテルイタリア軒  
3F サンマルコ

## I. 一般演題

## 1 加齢と性差による薬剤アレルギーの変化

宇野 勝次・小林 貴志\*

水原郷病院薬剤科

新潟薬科大学医薬品情報学\*

水原郷病院の過去3年7ヶ月間(2002.4～2005.10)でLMTにより起因薬剤を検出した薬剤過敏症患者156例を対象に、薬剤アレルギーの頻度、発現率、過敏症状および起因薬剤について加齢と性差の視点で検討した。

その結果得られた知見は、1. 薬剤アレルギーの頻度は加齢により増加(60～70代にピーク)し、女性の方が多いが、その要因は来院患者の頻度に起因する。2. 薬剤アレルギーの発現率は加齢により有意に低下するが、性差による変化は認められない。3. 薬剤アレルギーの症状は加齢による変化を認めないが、男性は皮疹に比べ肝障害が多く、女性は肝障害に比べて皮疹が多い。4. アレルギーの起因薬剤は、加齢により抗菌薬から循環器官用薬の割合が多くなるが、性差による変化は認められない。5. 加齢によるアレルギー発現率の低下はリンパ球の反応性の低下と使用薬剤に起因し、性差によるアレルギー症状の変化はホルモン(エストロゲン)に起因すると考えられる。

## 2 小児滲出性中耳炎及び副鼻腔炎に対するマクロライド療法の有効性について

江夏 照晋

(有) 参友堂 なごみ調剤薬局

小児滲出性中耳炎及び副鼻腔炎に対する14員

環マクロライドの少量長期投与について、これまでの経過を見直し、その有効性について分析・検討を行った。対象は滲出性中耳炎、副鼻腔炎及び両合併症に対しマクロライド療法が行われた165症例とした。その結果、マクロライド療法は副鼻腔炎、滲出性中耳炎、両合併症いずれの疾患においても高い有効率を示した。有効率を性別で比較すると、滲出性中耳炎において女児の有効率97.2%が男児の62%を優位に上回った。また、マクロライド療法の改善期間は副鼻腔炎で25日間、滲出性中耳炎では45日間必要であることがわかった。抗生剤別の有効率をみると、滲出性中耳炎や合併症ではCAMがEMより有意に有効率が高かった。CAMは有効性が高いが、苦味で服用困難の症例が少なからず認められるため、製剤上の工夫が必要と考えられる。

## 3 県立新発田病院における鼻咽頭検体由来の肺炎球菌・インフルエンザ菌に関する検討

大石 智洋・松井 亨・坂井 貴鼠

塚野 真也・田口 哲夫・高橋 直子\*

小野 智美\*・生方 公子\*\*

県立新発田病院小児科

同 細菌検査室\*

北里生命科学研究科感染情報学  
研究室\*\*

【目的】近年耐性化が問題とされている肺炎球菌、インフルエンザ菌について、薬剤耐性遺伝子の保有状況と抗菌薬前投与の影響につき調査する。

【方法】2006年に新潟県立新発田病院小児科受診呼吸器感染症罹患児より分離された肺炎球菌、インフルエンザ菌のPBP遺伝子解析および分離例の抗菌薬前投与の調査を行った。

【結果・考察】肺炎球菌はgPISPおよびgPRSPが90%以上を占め、全国データに比しPBP2X変異株の割合が多い傾向にあった。インフルエンザ菌は約半数がgBLNARで、全国データに比しgLow-BLNARが少なくgBLNASが多い傾向にあった。抗菌薬前投与の約6割を占めていたセフ

エム系抗菌薬の前投与のあった群では、*PBP2X* 変異株および *gBLNAR* が多い傾向があったことから、分離菌の耐性遺伝子は、抗菌薬前投与の影響を大きく受けていると思われる、今後さらに症例を蓄積し検討する必要がある。

#### 4 塩酸セビメリンによるシェーグレン症候群のドライマウス治療

戸谷 収二・又賀 泉\*

日本歯科大学新潟病院口腔外科

口のかわき治療外来

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座\*

塩酸セビメリンは、唾液腺に存在する M3 型ムスカリン性アセチルコリン受容体に高い親和性を示し、唾液腺を刺激して唾液分泌を促進させるムスカリン受容体作動薬で、治療が困難とされているシェーグレン症候群の口腔乾燥に対する効果がある。そこで今回、塩酸セビメリンを投与した症例について検討したので報告する。

対象は当院の『口のかわき治療外来』において1999年のシェーグレン症候群改定診断基準に従って診断し、塩酸セビメリンを投与した患者17例中、データが整った12例である。投与方法は塩酸セビメリン、1日90mg(30mg×3回)を原則として経口投与し、年齢、副作用により1日用量を60mgまたは30mgに減量投与することも可能とした。効果判定は自覚症状 他覚所見、唾液量分泌量(サクソソテスト)有害事象(副作用、血液検査)より総合評価した。

#### 5 糖尿病患者に発症した菌性蜂窩織炎の1例

辻内 実英・赤柴 竜・高田 正典

田中 彰・又賀 泉\*・高澤 哲也\*\*

日本歯科大学新潟病院口腔外科

日本歯科大学新潟生命歯学部口腔外科学第2講座\*

信楽園病院内科\*\*

抗菌薬の発達に伴い、菌性感染症が拡大進展し、

重篤な経過をとる症例は少なくなっているが、全身疾患を有する患者では時に重症化、遷延化を示す場合がある。今回、コントロール不良な糖尿病患者に発症した菌性蜂窩織炎の1例を経験したので、概要を報告した。患者は59歳男性。数日前より左側下顎部腫脹、疼痛を自覚。糖尿病コントロール不良のため2005年11月9日信楽園病院内科に入院、同日歯科口腔外科受診。臨床診断：左下第2小臼歯、第1大臼歯菌周炎起因口底蜂窩織炎。CEZ2g/day 静脈内投与開始したが腫脹は増悪し、11月10日口腔内切開排膿処置施行、抗菌薬をMEPM 1g/dayに変更した。しかし炎症は下方へ拡大を認めたため、11月11日当科紹介となり、左側顎下部切開排膿処置を施行。その後もCT上にて膿瘍腔はさらに拡大、縦隔炎への移行が懸念されたため、当科入院、顎下部、頸部からの切開排膿処置を施行、改善した。

#### 6 冬期の小児呼吸器感染症患者から分離された病原細菌について

高野 操・尾崎 京子・岩倉 信弘

山本 達男・仁田原義之\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

国際感染医学講座細菌学分野

にたはらこどもクリニック\*

2006年1～3月のインフルエンザ様症状を有する外来小児(n=433)の鼻腔内細菌叢を調べた。病原細菌検出率は肺炎球菌12.0%、インフルエンザ菌13.6%、ブランハメラ9.0%、A群溶血レンサ球菌13.6%、MSSA 28.6%、MRSA 0.5%であった。A群溶血レンサ球菌はインフルエンザ陰性群で陽性群より1.6倍高い保菌率であった。肺炎球菌は低年齢ほど保菌率が高かった。肺炎球菌(n=51)のペニシリン耐性はgPSSP 11.8%、gPISPの2X変異37.3%、1a+2x変異3.9%、2x+2b変異29.4%、gPRSP(1a+2b+2x変異)17.6%であり、2xと2x+2b変異株が多くを占めた。マクロライド系薬剤耐性遺伝子保有率は*mefA* 35.3%、*ermB* 43.1%、*mefA*+*ermB* 3.9%であった。インフルエンザ様症状の小児は、